岐阜県における農業と飛騨牛

２回生　渡邊　誠

1.はじめに

日本国内の 2016 年の農業産出額は『農業生産所得統計』によると 9 兆 2025 億円でそのうち畜産の分野は 3 兆 1626 億円で約 3 割を占めている。さらに肉用牛は 2016 年の産出額は 7391 億円で 10 年前の 2006 年 4781 億円からかなり産出額が増えていることが分かる。日本国内には神戸ビーフや松坂牛などのたくさんの牛肉のブランドが存在するが岐阜県にも飛騨牛という牛肉のブランドが存在する。岐阜県における肉用牛の農業産出額は約 100 億円を維持しており岐阜県全体では約 1 割の農業産出額である。飛騨牛はブランドが出来てから 30 周年を迎え、さらに多くの人々に親しまれている。注[1]

本稿では岐阜県の農業の現状を踏まえながら飛騨牛の生産と販売について考察していくことを目的とする。

2. 岐阜県における農業生産

まず、岐阜県の農業の概要を捉える。表 1 は 2016 年度の都道府県別の農業産出額の順位を示したものである。岐阜県は 1164 億円であり全体でみると 28 位ということが分かる。肉用牛の割合は高いが農業生産額は高くない。また、全国的にも肉用牛の割合と農業産出額の関係性は見られない。しかし九州では農業産出額と肉用牛の割合が共に多いことが分かる。岐阜県の農業産出額は図 4 をみると近年は約 1100 億円から約 1200 億円の間を推移し、産出額を保っていることが分かる。図 1 をみると野菜が一番多く米、鶏卵、肉用牛が多い品目となっている。畜産だけでみた図 2 でも肉用牛の農業産出額よりも鶏卵のほうが多く、鶏卵が畜産の農業産出額の約 3 割を占めているのに対して肉用牛の農業産出額は畜産の生産額の約 2 割とそこまで肉用牛の生産は盛んではないように思える。

しかし図 3 をみると農業産出額に占める肉用牛の割合は上位に九州の地域がある中で 13 番目に多いことが分かる。全国的にみると農業産出額に対しての肉用牛の割合は高く、岐阜県ではほかの都道府県と比べて肉用牛の生産が盛んであることが分かる。

1　飛騨牛銘柄推進協議会ホームページ http://www.hidagyu-gifu.com/
神戸肉流通推進協議会ホームページ http://www.kobe-niku.jp
松坂市ホームページ https://www.city.matsusaka.mie.jp/
より(すべて 2018 年 12 月 19 日最終閲覧)

表 1 都道府県別の農業産出額の順位　（2016 年度）

順	都道府県	産出額（億円）	肉用牛の割合（%）
1	北海道	12,115	8.6
2	茨城	4,903	3.4
3	鹿児島	4,736	26.3
4	千葉	4,711	1.7
5	宮崎	3,562	19.9
6	熊本	3,475	12.4
7	青森	3,221	5.2
8	愛知	3,154	3.4
9	栃木	2,863	7.4
10	群馬	2,632	5.8
11	岩手	2,609	11.0
12	新潟	2,583	1.3
13	長野	2,465	3.2
14	山形	2,391	4.8
15	静岡	2,266	3.6
16	福岡	2,196	2.9
17	福島	2,077	7.0
18	埼玉	2,046	2.2
19	宮城	1,843	14.7
20	秋田	1,745	3.6
21	兵庫	1,690	11.2
22	長崎	1,582	14.8
23	岡山	1,446	5.5
24	愛媛	1,341	2.5
25	大分	1,339	12.2
26	佐賀	1,315	12.9
27	広島	1,238	5.6
28	岐阜	1,164	9.3
29	高知	1,144	1.4
30	和歌山	1,116	0.8
31	三重	1,107	7.9
32	徳島	1,101	6.3
33	沖縄	1,025	21.6
34	山梨	899	1.4
35	香川	898	6.6
36	神奈川	846	1.4
37	鳥取	764	5.8
38	京都	740	2.8
39	山口	681	6.9
40	富山	666	1.8
41	滋賀	636	10.2
42	島根	629	14.0
43	石川	548	2.0
44	福井	470	1.7
45	奈良	436	2.5
46	大阪	353	0.3
47	東京	286	0.7

農林水産省　生産農業所得統計

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/より作成

（2019 年 1 月 9 日最終閲覧 ）

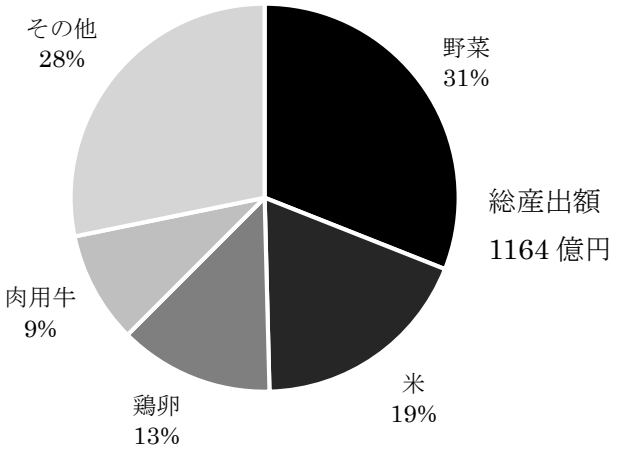


図１　岐阜県における農業産出額の内訳（２０１６年）

農林水産省　生産農業所得統計

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/より作成

(2018 年 11 月 20 日最終閲覧)

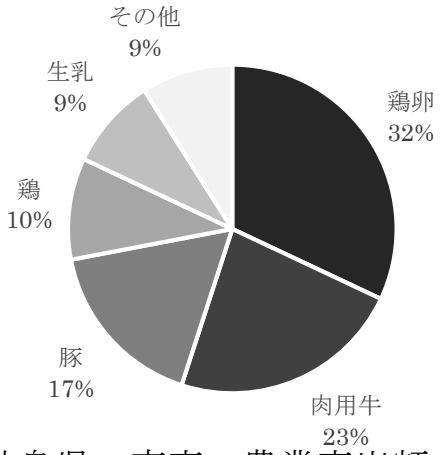


図２　岐阜県の畜産の農業産出額の内訳
(2016年)

農林水産省　生産農業所得統計

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/より作成

(2018 年 11 月 20 日最終閲覧)

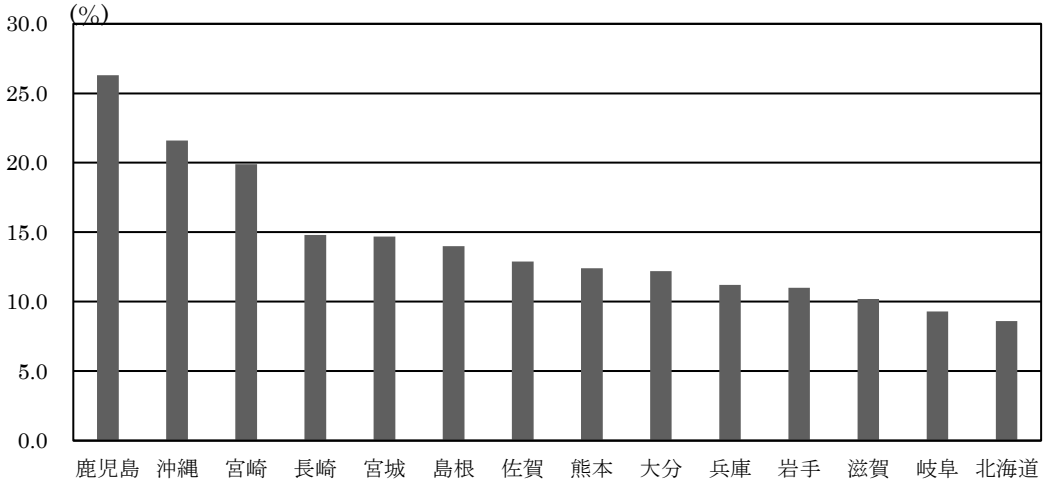


図3　都道府県別農業産出額に占める肉用牛の割合（2016年）

農林水産省　生産農業所得

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/より作成

(2019 年 1 月 9 日最終閲覧)

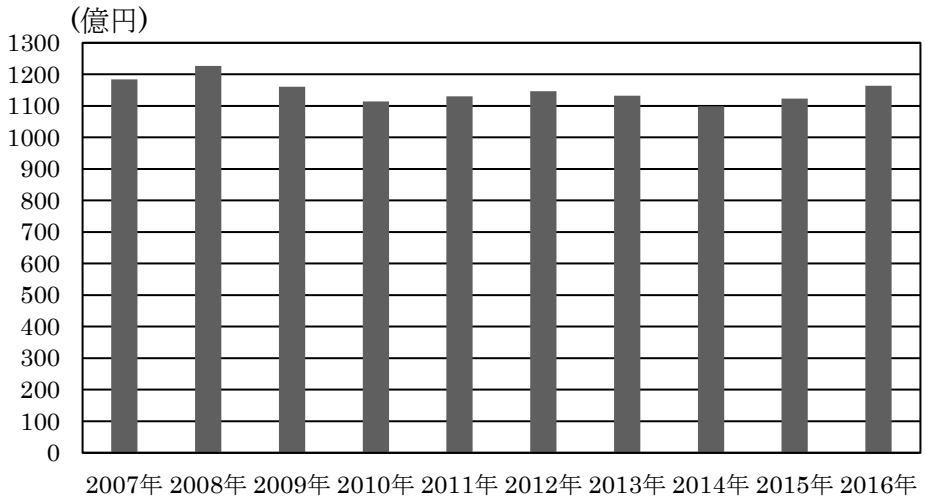


図4　岐阜県における農業産出額の推移

農林水産省　生産農業所得より作成

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/

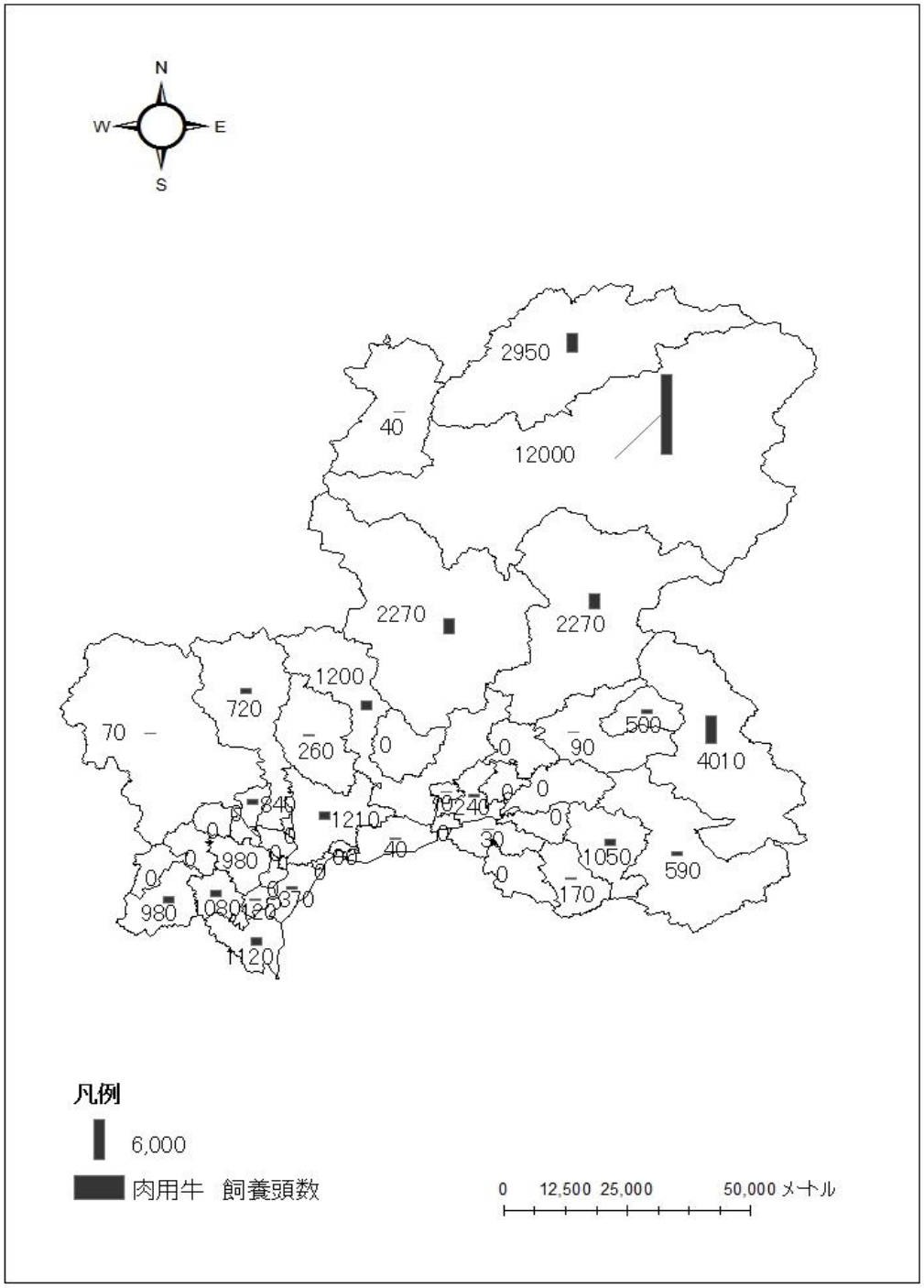
(2018 年 11 月 20 日最終閲覧)

3.岐阜県における飛騨牛の生産

岐阜県の肉用牛の飼養頭数は県北が多く、2005 年、高山市では 12000 頭の肉用牛が飼養されており、最も肉用牛の飼養頭数が多い。また、岐阜県の中心街のある岐阜市でも 1210 頭の肉用牛が飼養されており、朝日新聞注[2]より名古屋市中区で飛騨高山物産展が開かれ、飛騨牛の PR が行われたことからも名古屋や岐阜市などの都市への出荷が多いことが考え

[2] 2014 年 12 月 10 日　名古屋地方紙　朝刊 23 ページより

られる。



上位　高山市　12000 頭　中津川市　4010 頭　飛騨市 2950 頭

図 5　岐阜県の市町村別肉用牛の飼養頭数　(2005 年)

農林水産省　畜産累計統計

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sityo_tyouki/tikusan/k21.html より
(2019 年 1 月 9 日最終閲覧)

飛騨牛とは飼養期間が最も長い場所が岐阜県で飛騨牛銘柄推進協議会登録農家制度に認定･登録された生産者により飼育されている 14 か月以上飼育された黒毛和牛の肉牛である。また、公益社団法人日本食肉格付協会が実施する牛枝肉格付けにより肉質等級 5 等級・4 等級・3 等級と格付けされたものでなければならず、これを協議会事務局が確認し認定したものが飛騨牛となる。

飛騨牛の歴史は1981年に安福号という種牛を県が1000万で落札したことからはじまり、優秀な品種が広がった。その後、吉田ハム（株）の商標であった飛騨牛を吉田ハムの全面的な協力を得て統一名称を岐阜牛から飛騨牛に変え、飛騨牛銘柄推協議会が設立された。当初は 5 等級のものしか飛騨牛と認定されなかったが消費者の赤身志向の高まりや飛騨牛をより身近なものへとするために 4 等級や 3 等級も飛騨牛と認定されるようになった。表 2 はほかのブランド牛との比較を表しており飛騨牛は 3~5 等級のものが認定されており、比較的高い肉質等級で年間の出荷頭数も約 11000 頭と多いことがわかる。注[3]

表 2　主なブランド牛の比較表

	飛騨牛	神戸ビーフ	松坂牛
肉質等級	3～5 等級	4～5 等級	1～5 等級
歩留等級	A･B	A･B	A･B･C
飼育地	岐阜県内	兵庫県内	三重県内 22 市町村
出荷頭数(2015)	約 11000 頭	約 5000 頭	約 7400 頭

飛騨牛銘柄推進協議会 HP、神戸肉流通推進協議会 HP,松坂市 HP より

表 3　岐阜県における肉牛の飼養頭数とそのうちの和牛頭数の推移

年次	肉牛飼養頭数	うち和牛頭数	和牛率（%）
2006	32496	13941	43
2007	28644	13951	49
2008	25682	13427	52
2009	24262	13399	55
2010	22880	12802	56
2011	21465	13005	61
2012	20463	12704	62
2013	19598	11712	60

[3] 飛騨牛銘柄推進協議会 HP 参考

2014	19368	11701	60
2015	17918	10822	60
2016	16429	10418	63

農林水産省畜産物生産費統計

http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/noukei/seisanhi_tikusan/より作成

(最終閲覧 2019 年 1 月 11 日)

表 3 は岐阜県における飼養頭数の推移とそのうちの和牛の推移を示している。年々肉牛飼養頭数と和牛頭数は減ってしまっているが、和牛率は年々増加している。JA 全農岐阜における聞き取り調査によれば岐阜県全体の農家が減ってしまっているため肉牛と畜頭数と和牛頭数が減ってしまっているが少ない数でも利益を出すために利益率の高い和牛を生産しているためである。

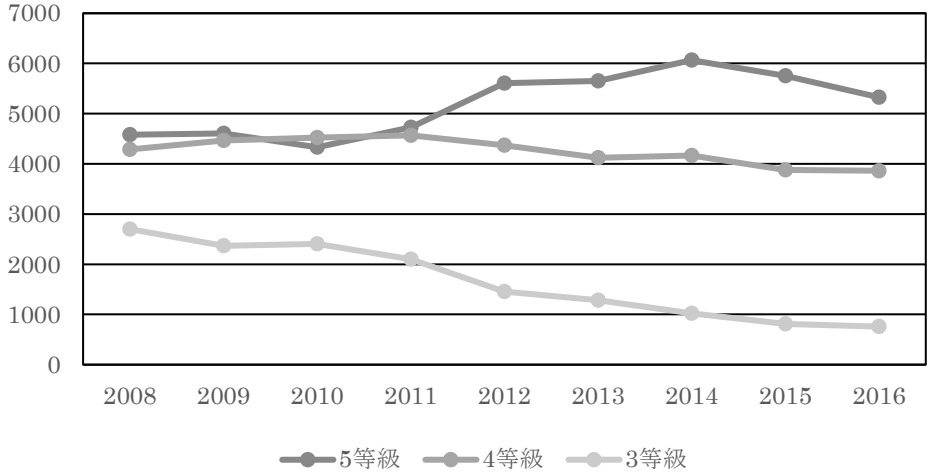


図6　飛騨牛の等級別内訳の推移

全農岐阜本部調べより作成

図 6 は飛騨牛の等級別内訳の推移で 5 等級は近年増加傾向、4 等級はほぼ横ばい、3 等級は減少傾向にあることがわかる。JA 全農岐阜における聞き取り調査よれば飛騨牛生産者の技術が上がり、本来なら 3 等級や 4 等級までしか育てることができなかった牛が 5 等級になるなど、よりよい品質のものを生産できるようになったとされる。

表 4　和牛枝肉卸売販売価格の推移

年次	東京			岐阜		
	A-5	A-4	A-3	A-5	A-4	A-3
2006	2469	2187	1980	2742	2409	2094
2007	2476	2148	1857	2677	2354	2042
2008	2362	1964	1641	2425	2094	1818
2009	2201	1782	1518	2443	2098	1781
2010	2108	1715	1496	2495	2495	1751
2011	1884	1558	1314	2178	1751	1528
2012	1940	1655	1453	2225	1901	1685
2013	2128	1884	1720	2312	2053	1889
2014	2213	1938	1766	2368	2056	1873
2015	2552	2362	2223	2936	2719	2519
2016	2859	2619	2445	3307	2925	2673

農林水産省畜産物流通統計
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/tikusan_ryutu/より作成
（2019 年 1 月 11 日最終閲覧）

表 4 は東京と岐阜の和牛卸売価格の推移を示しており、いずれの年も岐阜県での和牛の卸売価格が東京の和牛の卸売価格を上回っていることがわかる。JA 全農岐阜における聞き取り調査よれば、これは東京の和牛はブランド牛でない様々な和牛が販売されている一方で岐阜県内の和牛は多くが飛騨牛のブランドがついていることによるものである。それだけ飛騨牛はブランドとしての価値があることがわかる。また、岐阜県内の卸売価格も年々上昇している。これは飛騨牛自体の数が少なくなっている影響もあるが飛騨牛の希少性や価値が上がっていると考えられる。

表 5　飛騨牛輸出実績(単位：kg)

国　地域	2014	2015	2016
香港	12367	14943	16272
タイ	2314	3982	1957
シンガポール	979	2828	741
マカオ	0	80	1689
イギリス	0	527	1004
アメリカ	0	91	924
その他	402	1033	1997
計	16062	23484	24584

岐阜県農政部農産物流課調べより作成

補足：牛は出荷時にはだいたい 600kg、なので香港には 2016 年は約 27 頭分が出荷されている。

表 5 は飛騨牛の海外への輸出実績を示している。飛騨牛の海外への輸出は県が全農岐阜と連携して行うため、注[4]　輸出する地域や国や量が限られているが香港やタイへは 2000 年代後半から売り出しているため、多くの販売実績がある。2017 年はイギリスやフランスなどのヨーロッパへの飛騨牛の売り出しも積極的に行っている。

表 6 JA 飛騨ミートの競り市場販売状況

年次	区分	県内(飛騨)	県内(美濃)	中京地区	北陸地区	合計
2009	頭数	2381 頭	2195 頭	319 頭	315 頭	5210 頭
	構成比	46%	42%	6%	6%	100%

参考　JA 飛騨ミート提供資料

補足　県内の業者が買って、県外に売る場合も多くある。

[4]　岐阜県庁 HP より　（最終閲覧 2019 年 1 月 11 日）
https://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/nogyo/horei/11411/index_11135.html

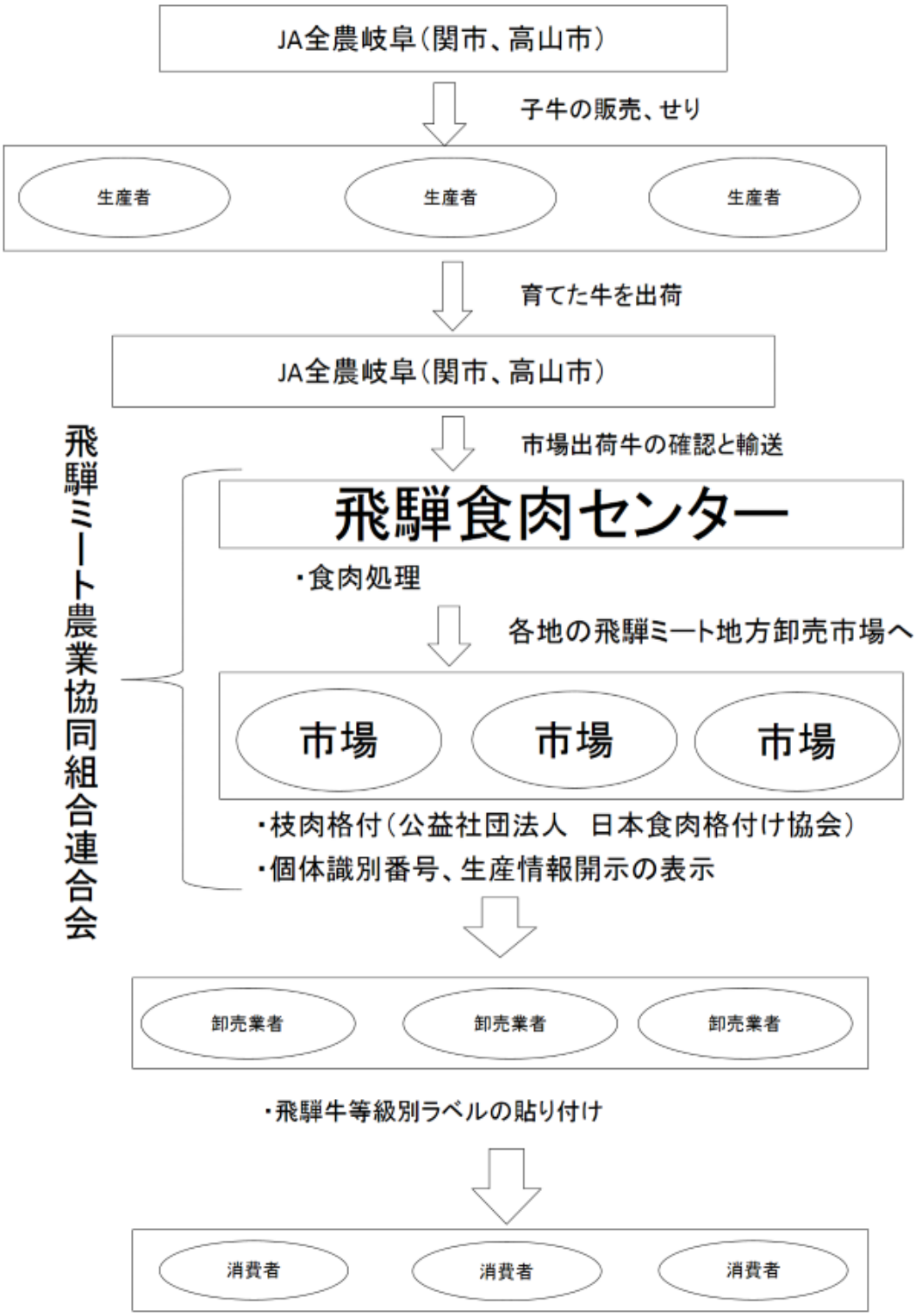


図 7 飛騨牛の流通経路

参考　JA 飛騨ミート HP http://www.hidameat.or.jp/ryutsuu/ryutsuu.html

（最終閲覧 2019 年 1 月 11 日）

図 7 は飛騨牛の流通経路を示している。飛騨牛は約 7 割が県外で生まれた子牛を購入して育てているために子牛を県外から JA 全農が買い取って年に数回関市と高山市で子牛の競りを行っている。そこで買い取られた牛は農家によって育てられ、出荷できる状態になったら JA 全農岐阜に出荷することになる。JA 全農岐阜は子牛の販売から農家の補助なども行うため、牛の出荷数や健康状態をスムーズに管理することができる。JA 全農岐阜に送られた牛は飛騨食肉センターに送られて食肉処理が行われる。そしてそれぞれの地区の市場に送られて販売業者が購入することによって消費者に届けられる。飛騨食肉センターとそれぞれの市場は飛騨ミート農業協同組合連合会によって運営されているため、食肉処理から販売まで高い品質と安全性を保つことができる。また、表 6 では飛騨ミートの競り市の販売状況を示しており、5210 頭のうち約 4500 頭が県内の販売業者へと販売していることから、飛騨牛は県内の業者が購入してそれを県外や県内に販売していることが多いことがわかる。

4.飛騨牛の役割

肉用牛の農家は『畜産統計調査』によると全国の飼養戸数は 2008 年では 80400 戸あったのが 2018 年は 48300 戸まで減っており全国的にも減少している。岐阜県では JA と飛騨市が共同出資して飛騨牛の繁殖と人材育成を目的として「株式会社ひだキャトルステーション」を設立する。来春（2019 年）から研修生 2 人を受け入れ牛の繁殖を進める予定だ。この企業は廃業した農家の牛舎を再利用し、雌牛 100 を飼育しながら若手の人材を育てる計画を出している。岐阜県内にはこれまで畜産に携わる人材育成施設はなく、さらなる飛騨牛の発展に期待したい。注[5]

全国的に農家が減少する中で農産物自体の生産量は徐々に減少している。宮崎は畜産農家が減少し、集落の中では点の存在になっている地域が圧倒的に増えており、より畜産農家にとって環境が悪くなっていると述べている。その中でも岐阜県における農業生産高は少し落ちているがそれでも 1100 億円から 1200 億円の間を維持している。これは少ない生産高でもブランドを作ることや品質を向上させることによって利益を出し、農業を守る努力を行っているということがわかる。岐阜県における肉用牛もその例外ではない。2006 年から 2016 年にかけてと畜頭数は約半分にまで減っているが肉用牛の農業産出額は 103 億円から 108 億円と増加している。これはできてから 30 年たつ飛騨牛が高い品質とブランド価値を持ちはじめているということが考えられる。高い品質と技術を持ったまま後継者である若手の育成を行い、飛騨牛の生産が増えるとさらなる農業産出額を生み出していくことができるだろう。また、肉用牛産業で高い利益を出すことができれば更なる農業の発展へとつながっていくだろう。

---

[5] 参考　朝日新聞　2018 年 11 月 17 日　朝刊 27 ページ　岐阜全県

5.終わりに

本稿では飛騨牛の生産と販売について考察してきた。飛騨牛は生産者だけではなく、JA全農岐阜や飛騨ミート農業協同組合、そして販売業者が協力して販売や生産を行うことによってブランド価値工場や、品質の向上がなされてきた。また、市や県も出資を行ったり、海外へと販売したりすることによってさらなる飛騨牛の発展に努めていることが分かった。日本の第一次産業は海外の安い輸入品に押されて廃業してしまうところも増えている。当然、利益を出すことができなければ廃業するしかないということになるので何とかして利益を出す必要がある。利益を出すためには海外や県外への認知度を上げること、また、生産量を増やしていくことが求められるだろう。

付記

本校を作成するにあたり、JA 全農岐阜畜産部の高坂茂様、高田敦様、岐阜県農政部農産物流課の後藤達彦様、小森志保様、株式会社ネオプライムヒグチの吉田知泰様、上村直義様にはお忙しいなかにも関わらず大変お世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。

文献

宮崎　宏編　（1993）『国際化と日本畜産の進路』　社団法人　家の光協会